



TITLE:

日食異聞

AUTHOR(S):

谷, 啓一郎

CITATION:

谷, 啓一郎. 日食異聞. 天界 1936, 16(183): 358-360

ISSUE DATE:

1936-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167262>

RIGHT:

日 食 異 聞

谷 啓 一 郎

(上)

曩日、ある處で“皆虧日食”の話をしてみたら、傍らにゐた1人の女性が——だけど、どうして、それが新聞なんかには……あんなに大きく書いて騒ぎ立てることなんかしら。と、いかにも不審氣に訊ねるのである。

なる程、この女性にしてみたら皆虧日食などよりも、勝美夫人の醜聞の方が、より大きな關心事であるし、もつと切實な問題であるかも知れない。してみると、科學者の仕事なんて、實際地味なものだ……と、染々寂しい氣持にさせられた。

尤も、さういふ私自身、果して皆虧日食について、どれだけの知識を持つてゐるか……頗る怪しいものである。

× × ×

皆虧日食といふものは、この地球上において、大體3年間に2度といつた割合で起つてゐるものださうである。

だから地球全體からみると、たいして稀有な現象ではないのだ。ところが、この3年間に2回の中1回の日食は人間の行けないやうな場所で起ることが多い。譬へば大海洋の眞只中だとか、無人島だとか、或はまた、南、北極の涯だとか……等々といふやうに——。

従つて、3年間に2度の割合で起つてゐるといひながら、實際に人間が觀測できるのは、その内の半分、つまり3年に1度といふ勘定になる譯だ。

しかも、それが一つ所で起るのではない。

この前の日食が南洋なら、今度の日食はシベリアの涯、その次ぎは地中海の眞中といふ工合で、世界中を飛び歩くやうに起る現象なのである。

こゝに、日食觀測の一つの困難がある譯なのだ。

或る學者の計算によると——われわれが、試みに一定の土地、つまり大連なら大連に固住して、皆虧日食の起るのを待つとすると、平均360年間に1度、漸くそれに出會はすことが出来るのださうである。

皆虧日食といふものが、如何に稀有の現象であるか、この一事によつても知ることが出来るだらう。

× × ×

日食観測の主目的は、結局“太陽”の正體を掴むことだ……といふことは、誰でも識つてゐるだらう。

しかし、2分乃至3分といふ皆虧繼續時間を以つて、太陽の正體をつかみ、宇宙の眞理を究めようとする科學者の努力を識つてゐる人は尠い。

皆虧日食に對する科學的な観測が開始されてから今日まで、2分3分の短い時間を利用して科學者達が積み重ねてきた日食観測の歴史は、これを時間にして總計してみると僅か1時間にも満たぬものだといふ。

この6月19日には、この歴史に更に2分餘の時間が新たに加へられる譯だが、斯うみてくると、“皆虧日食”も、妙な醜聞などに劣らぬ興味を感じさせるだらうではないか。

(下)

わが國における“日食”の記録の最古のものは「日本書紀」の中にあると聽いてゐるが、私は不幸にして、未だそれを讀む機會を持たない。

曾て、或ひは最近、私の讀んだものゝ中から、“日食”に關する記録を拾ひ出してみると

太田南畝の問ひに瀬名貞雄が答へたといふ「瀬田問答」、京山百樹が、晩年に至つてものした隨筆集「蜘蛛の糸巻」、それに馬琴の「兎園小説」等である。

尤も、これ等は筆者が同じ時代の人達だつた所爲もあるのだらうが、何れも天明6丙午年元日の皆既日食について記してゐるのだが、科學のオリンピックといはれる今日の日食観測戦とひき較べて、なかなか興味深いものがあるから、左に、その一部を抜書きしてみよう。

丙午正月元日、日蝕皆既、午の1刻西の方よりかけ初め午6刻甚しく未の2刻南の方に終る。

正月元日日蝕の例

元祿 5壬申年 未申の時食7分半。

同 14辛巳年 卯辰の時食8分半。

享保 4己亥年 酉の時食2分・

明和 4丁亥年 未の8刻より申の刻迄・

以上は、瀬田問答⁷の中のものであるが、こゝでいふ正月元日といふのは、無論舊暦のことであらう。

天 鼓 の 妖

明くれば天明6丙午年元日も午日食皆既（元日4つ時より日食闇の如し諸侯は大半登城なし給ひしが退出なり難く下馬の供侍の士蝕にあたりて氣絶せし人², 3人ありしとぞ）いかなる天災にやならんと諸人安き心はなかりしに初春より雷にもあらざる響天にあり北に聞くかと思へば南にあり四方所を移し晝夜定まらず物しる人は天鼓ならんといへり、おもふに明の英宗が天順7年癸未の年天鼓の妖あり時に賢臣李賢凶兆なりと評したる事明史に見ゆ。果して同年8月より大樹君御不例8月1日沼田侍従城を削られ滅地1萬石雁之間詰屋敷3日の間に取り拂ひ相良城御取上（中略）何者の浮言にや兩水道に毒ありと流傳して市中騒動いふべからず（後略）

これは、蜘蛛の糸巻⁷の1節である。當時の江戸市中における騒動が思ひやられるが、これが、兎園小説⁷になると更に深刻に描寫されてゐる。

天明7年丙午の春正月元日の巳のときばかりに、日蝕皆既なり貴賤となく、貧富となく立ちかへる事のはじめを、なべてことぶくときなるに、くへのうち忽にとこやみとなりしかば、心あるもこゝろなきも、驚き怕れずといふものなし（中略）かくてこの日、火災あり、これより後雨は稀にて風のしばしば吹けばにや、江戸の中、日毎日毎にこゝかしことなく兩3ヶ所づゝ失火延焼してければ、人みな駭き惑ひつゝ、ぬりごめをもてるは、家財集具を索もてからげ、衣裳調度を葛籠單笥におしいれて、所せまきまで積みかさねつゝ、今焼けぬと待つがごとし。（中略）客ある家のともすれば茶碗にすらことをかきたり、さればとておのおのも遠謀深慮あるにはあらで、人ぞよめきの勢ひなれども、これも時變の一端なるべし。かう罵りさわぐこと正月2月甚しく、3月に至りてもなほ人こゝろしづかならず。4月なかばになりてこそ、世はやゝのどかになりたれ。（後略） —（満洲日々より）—

東 亞 天 文 協 會 々 旗 完 成 ！

大阪支部の西森菊雄氏は 過般の本會々員徽章に應募し、1等に當選したのでを記念に、今回白地にマ1クは青く東亞天文協會の文字は赤く染めぬいた會旗を3本、本會に寄贈された。因みに1本は花山本部に、1本は大阪支部に、あと1本は花山第3觀測隊の遠輕へ持參された。